（別紙３）

公表　児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援・放課後等デイサービス でいじー			
○保護者評価実施期間	2026年1月26日		～	2026年2月10日
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	16	（回答者数）	15
○従業者評価実施期間	2026年1月26日		～	2026年2月10日
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	8	（回答者数）	7
○事業者向け自己評価表作成日	2026年2月12日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	土・日・祝日にクッキングや製作、外出支援等のイベントを実施し、日常では得にくい経験機会を提供するとともに、楽しみながら社会性や生活スキルの向上につなげている。	単なるレクリエーションではなく、活動ごとに「ねらい」を明確に設定している。 発達段階や特性に応じて役割分担を行い、全員が成功体験を得られるよう配慮している。	クッキングや製作等の活動は充実している一方で、運動系やその他の体験型イベントがやや少ない状況であるため、内容が偏らないようバランスの取れたプログラム構成を検討していく。 各イベントのねらいや療育的意義について、その都度保護者へ丁寧に発信し、支援効果の見える化を図っていく。
2	事業所内を学習スペースと運動スペースに区分しており、児童にとって活動内容や目的が視覚的にも分かりやすい環境を整えている。	活動内容に応じて空間を明確に分けることで、見通しを持ちやすい環境設定を行っている。 学習と運動それぞれの活動に集中できるよう、刺激量を調整している。	運動スペースと学習スペースは区分しているものの、パーテーションでの仕切りであるため、活動内容によっては学習時の集中に影響が出る場合がある。そのため、必要に応じて個室スペースを積極的に活用し、児童が落ち着いて取り組める環境調整を行っていく。
3	運動療育に関する器具や備品を豊富に整備していることに加え、理学療法士が常勤で配置されているため、専門的視点に基づいた多角的な運動療育の実施が可能となっている。	収納スペースの都合上、跳び箱の設置は行っていないが、職員が補助役となるなど工夫を行い、代替的な方法で跳躍動作の練習機会を確保している。 限られた環境の中でも、創意工夫により運動療育の幅を広げている。	理学療法士の専門的知見を職員全体へ共有し、支援力の底上げを図る。 外部研修等へ参加し、専門性の向上を継続する。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者が実際の療育の様子を見る機会が少なく、また保護者同士や地域との交流の機会も十分とは言えない	日々のフィードバックは行っているが、実際の様子を「体験」できる機会の設定が不足している。 地域とのつながりを深めるイベント等の企画・提案については、これまで十分に実施できていなかった。	年数回の参観日やミニ公開療育の実施を検討する。 地域住民が気軽に参加できる開かれたイベントを開催し、事業所と地域とのつながりを深めていく。
2	運動療育特化型の事業所であるが、十分な運動を実施するには室内スペースが狭く感じられる場面がある。	テナント型施設であるため、物理的な面積に限りがある。 利用児童数が増えた時間帯に、活動スペースが十分確保できない場合がある。	限られた空間でも効果的に行えるサーキット運動や体幹トレーニング等のプログラムを充実させる。 公園・地域施設等の屋外資源を積極的に活用し、運動機会を確保する。
3	言語療育に特化していることを打ち出しているが、現状言語聴覚士が在籍していない。	言語聴覚士の人材確保が難しく、採用が計画通りに進んでいない。	職員への言語発達に関する研修実施により、基礎的支援力の底上げを図る。